

公益財団法人 全国学校農場協会新聞

第1号

発行所
公益財団法人
全国学校農場協会

東京都渋谷区
円山町2-20

全国大会講演〈要旨〉

演題 『21世紀の教育の原点
に農業を―生命誌からの提
言―』

講師 JT生命誌研究館
名誉館長 中村桂子 先生



私たち人間が地球に生きる多様な生きものの中で特別な存在になったのは、今から1万年ほど前に農耕を始めてからです。それ以来、私たちはより豊かで、より幸せな暮らしを求めて努力してきました。けれども、21世紀になって、自然破壊、異常気象、さらには、コロナ・パンデミックなどの問題が起き、しかも人間社会は格差の拡大という問題を生み出しています。これまでの生き方の見直しが求められているのです。

国連主導で進められているSDGsや多くの技術開発など、様々な動きがありま

す。農業の役割は、炭素化合物を生み出すことです。「脱炭素」は生きものは炭素でできているという本質に目を向けていない人が用いる言葉です。

そこで私は、生命科学研究所が明らかにした「人間は生き物であり自然の一部である」という事実を踏まえて、人間にとつての農耕の意味を考え、農業を生活の基盤とする社会を作ることが最も大切なことではないかと提言したい。そこでの農業教育は、農業の専門高校へ入学した生徒・学生への農業指導、特にその技術指導に止まらず、これが教育の原点になるという意識で行われるものになるはず。その原点を示したのが、『生命絵巻』左図です。



ここで重要なのは、人間が多様な生き物の一つとして存在することです。現代

社会は、あたかも人間は自然の外からそれを支配できるかの如き動きをしています。自然の中にいながら、生態系、中でも特に土の力を活かした農業をしようという動きが世界的に盛んになっています。欧米、南米、アフリカなど様々な地域でのその土地を活かした農業は興味深いものです。

このような農業を始める、私たちは「私たち生きものの中の私」という意識で行動できるようになり、この意義を持てば戦争や格差のある社会が、いかに無意味であるかが見えてきます。生態系を活かした農業は食べ物づくりだけでなく、人間を育て、暮らしやすい社会を作ることでもあります。

農業教育に関わる方が、「生きものとしての農業」を意識して下さると、暮らしやすい社会という明るい未来が見えてくると思っています。

【参加者からの質問】

(質問) 農業教育に関しての発信したきっかけについて教えてもらいたい。

(回答) 農業クラブがきっかけです。生徒の発表に感動しファンになりました。また、食肉に加工されることを知りながら豚の飼育をしている生徒がいて、教員と生徒の関わりにも感動しました。人間が生きるうえで必要な農業を教育している農業高校を増やすことが重要だと思います。

※公益財団法人全国学校農場協会のホームページ
(<http://www.nojokyakai.or.jp/>)でも御視聴できます。

文部科学省 講演

演題 『高等学校教育の現状と課題について』 (文科省初等中等教育局参事官(高校担当) 田中 義恭 先生



1 専門高校を取り巻く現状について

① 令和11年度には15歳人口が100万人を下回る。全国の高校数は882校。農

業高校は46%。不登校児童生徒が増加し、通信制高校への進学者が増加。生徒の自己肯定感が低い。学校満足度は専門学科では高い傾向が予想できる。

② 高等学校教育改革

少子化の中、高等学校教育。全日制、定時制、通信制の望ましい在り方の検討を進め、社会に開かれた教育課程の実現、探求・文理横断・実践的な学びの推進をする。

③ 専門高校と地域・産業界・大学などの連携
マイスター・ハイスクール（地域産業界へ進出できる人材育成）の伴奏事業に取り組んでいる。全国産業教育フェア（福井県）の紹介。

④ 専門高校の魅力発信
高等学校の特色化・魅力化の取組及び指導実践事例に関する効果的な広報戦略実証事業では、専門高校の動画や都道府県や専門高校における取組例の紹介があった。

2 産業教育施設・設備の整備について
スマート農業取組例と令和3年度の農業教育施設・設備の整備の報告が大会2日目にあった。

I 「研究発表・協議会」

① 機械・情報部会

「各学校で使用している農業機械及び一般車両の調査」
千葉・下総高等学校
教諭 荒木田光生

② 造園部会

「平成30年度告示による新学習指導要領実施に向けた造園関連科目の実施について」
山梨・農林高等学校
教諭 塩野哲男

③ 地域交流部会

「地域連携事業の実施状況調査と地域連携活動の紹介」
神奈川・相原高等学校
教諭 小泉幸夫

④ 学校経営系分科会（学校特色化部会）

「地域連携活動による問題点・課題について」
千葉・多古高等学校
教諭 伊藤雄切

教諭 内藤康明

II 「指導講評」

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター
研究開発部教育課程調査官
遠藤 友治 先生



農業機械等に関する発表では、予算要求に関してはスマート農業教育の実際の活用の様子を伝えて予算要求にも活用する。

造園教育については横断的なカリキュラムマネジメント、資格取得に関しても様々な取り組み、ICTや評価などについても知ることができた。

地域連携事業に関わる二つの発表では、地域連携活動を通して生徒に身につけるべき資質・能力が果たして身に付いているのだろうか。と常に念頭に置きながら進めていくことが大切である。

新しい学習指導要領が始まり、農業教育のよりよい

あり方を考えていく必要がある。例えば、生徒に身につけるべき資質能力とは何か、社会に開かれた教育、主体的で対話的で深い学びとなっているか。観点別評価では、適切な評価方法、教員の指導改善、生徒の学習の改善につながっているか。また、カリキュラムマネジメントに対する評価となっているか。学習内容は持続的な生産・供給、座学と連携の取れた実習、プロジェクト学習に取り組んでいるかなどを改めて確認し、農業教育をリードしてほしい。

安心安全な持続的な食料の供給、総合生命産業としての農業の役割、価値は一層大きなものになっており、農業高校の活動に一層期待が高まっています。地域の産業や学校の実態を踏まえて教育課程はどうあるべきかを考えてください。チーム農業として持続可能な一層の発展に向けてさらに一歩進んでいければと思います。農業高校生の素晴らしい教育力を十分な活用に夢が膨らむばかりです。

人類が直面する問題に答える。それが実学。

温暖化、資源枯渇、食料危機、絶滅危惧種の増加など研究対象は農業を起点に、あなたが想像する以上に広がりを見せています。

このような問題に答えていく学びや研究を在学中に体験することを実学と呼んでいます。

人類が直面する問題に答えていく人材を世の中に還していくことが東京農大の普遍的な使命なのです。



東京農業大学
TOKYO UNIVERSITY OF
AGRICULTURE
〒156-8502 東京都目黒区目黒1-1-1
https://www.tnod.ac.jp/

農学部

応用生物科学部

生命科学部

地域環境科学部

国際食料情報学部

生物産業学部